

Title	Essays on Intergenerational Transfers and Economic Growth
Author(s)	水島, 淳恵
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49064
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	みず しま あつ え 水 島 淳 恵
博士の専攻分野の名称	博 士 (経済学)
学 位 記 番 号	第 2 1 5 1 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 7 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 経済学研究科経済学専攻
学 位 論 文 名	Essays on Intergenerational Transfers and Economic Growth (世代間所得移転と経済成長に関する研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 二 神 孝 一 (副査) 教 授 三 野 和 雄 准教授 小 野 哲 生

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は世代間の所得移転がマクロ経済に与える影響を理論的に解明した上で、高い成長率や社会厚生を達成させる政策の方向性が示されている。本論文は序章における論文全体の解説と、5つの章で構成される本文、第7章の結論により構成される。

第2章から第4章では、健康財需要がマクロ経済に与える影響について、寿命の不確実性を導入したモデルのフレームワークで考察される。まず、第2章では、病院・介護サービスといった直接的健康財需要と、サプリメント、運動などの間接的健康財需要が個人の所得移転、経済成長率、および社会厚生に与える影響が分析される。その結果、(1)期待寿命の増加は経済の成長率を増加させること、(2)現在世代の厚生は、期待寿命が十分小さい(大きい)ときほど上昇(低下)することが示される。

つづく第3章・第4章では、健康財需要のうち介護需要に焦点をあてた研究が論じられている。第3章では、子供が労働・介護選択を行うときの均衡動学が分析され、初期値の状態によって均衡経路がサドル・ポイントになるのか、不決定になるのかが示される。

第4章では、第3章のモデルを拡張し、公的介護政策の厚生効果が検討される。まず、政府が所得税によって財源を賄うとき、定常における資本蓄積は低下することが示される。その結果、税率が十分小さいときには、公的介護政策は厚生水準を上昇させることが明らかにされる。

第5章では、世代間所得移転に不確実性がある経済におけるリスクシェアリングのメカニズムが、成長モデルで構築される。リスクシェアリングが所得の不確実性を同世代間でシェアする機能を持つとき、リスクシェアリングは将来の不確実性に備えて貯蓄をする予備的貯蓄動機を低下させることになる。その結果、現在世代の厚生は上昇するが、経済成長率は低下することが示される。

第6章では、自らの教育獲得水準に関心を持つ個人の家計内でのバーゲニングモデルが構築される。まず、子供の教育・家事などの家計の公共財供給に関して、パートナー間に戦略的補完性が発生することが指摘される。その結果、(1)公共財供給の水準を低下させることと(2)教育獲得水準を増加させることはいずれもパレート改善となることが示される。

論文審査の結果の要旨

本研究は、世代重複モデルを用いて子供世代と親世代の関係について分析したもので非常に興味深い結果を導出している。子供が親の面倒を見るか否かについて不確実性が存在する場合の保険市場が成長に果たす役割の分析をおこなっている。また、親の介護に対して時間という資源を配分する必要がある場合に複数均衡が生じ、介護を行う均衡とそうでない均衡が発生することを示している。これらは非常にオリジナリティの高いものである。以上から、博士（経済学）に十分に値すると判断する。